

特集 周恩来時代の試煉

十全大会の核心と深層

王洪文報告に、林彪異変のナゾに大きな示唆を与えると思われる「衝撃の手がかり」を見る

中 なか

嶋 しま

嶺 みね

雄 お

東京外国語大学助教授

林 彪

劉少奇は、敵に殺降した者や変節者をかかえこみ、一群の裏切り者、特務、資本主義の道を歩む実権派をかきあつめてきた。彼らは、自分たちの反革命の政治的経験をひたかくしにし、互いにかばいあい、グルになつて悪事をはたらき、党と国家の重要ポストをかすめとり、中央から地方にいたるまでの多くの単位の指導権をにぎり、地下のブルジョア階級司令部をつくつて、毛主席をはじめとするプロレタリア階級司令部にたてついたのである。

周恩来

……毛主席に反対し、毛沢東思想に反対する者がいれば、それが誰であらうと、全党こそつてこれを糾弾し、全国をあげてこれを討伐するのである（九全大会政治報告、傍点引用者）。

林彪らのおしすすめた反革命の修正主義路線の本質、彼らがおこした反革命武装クーデターの罪悪的なねらいは、党と国家の最高権力をのっとり、九全大会の路線に完全にそむき、社会主義の全歴史的段階におけ



中嶋嶺雄

一九三六年長野県生れ
東京大学大学院卒業
国際関係論・現代中国史専攻
著書「現代中国論」
「中国像の検証」
「中国をみつめて」ほか

プロローグ

る党の基本路線と政策を根底から変え、マルクス・レーニン主義の中国共産党を修正主義のファッショ党に変え、プロレタリア階級独裁をくつがえし、資本主義を復活させることにある。……林彪反党集団の破壊は、党内の二つの路線の闘争が終結したことを意味しない（十全大会政治報告、傍点引用者）。

☆ ☆ ☆

王洪文——路線にかかわること、大局にかかわることであれば、真の共産党員は公につくす心をいだいて、免職をおそれず、党からの除名をおそれず、入獄をおそれず、殺害をおそれず、離婚をおそれず、敢然と潮流にさらわなければならない（十全大会党規約改正報告、傍点引用者）。

国際政治の著しい多極化と相互促進の関係を結んで打ち出されつつある中国の対外目標にかんしていえば、今日ほど、その行動のバターンを予測することが容易な時期はないであろう。だが、外交と内政との拮抗関係がきわめて顕著であるはずの中国の国内政治の動向については、今日ほど不分明で予測しがたい時期はない。

い。やがて来たるであろう「毛沢東以後」の中国については、すでに様々な観測があり、毛沢東の死がもたらすであろうインパクトについても、それなりの衝撃緩和装置が外部世界の側に準備されつつあるとはいえ「毛沢東以後」の中国を確固として展望することは、今日、ほとんど不可能である。

その本質的な理由は、誰の目にも明らかであるように、中国はいまや一つの歴史的時代の終りに近づきつつあるにもかかわらず、一九六〇年代後半から始まったこの歴史的な転換期における中国自身のリーダーシップと政策があまりにも流動的でありすぎ、あまりにも多くの矛盾とナゾにおおわれていすぎる点に求められよう。この流動性と矛盾とナゾとは、私がかここで分析を試みようとする中国共産党第十回全国代表大会（十全大会）を一貫して規定するところのものでもあるのだ。

極秘裡に開かれた十全大会

北京で再びなにか重大な政治的变化が進んでいるのではないか、九年近い空白のちに全国人民代表大会がよいよ開かれるのではないか、新しい党大会が開かれているのではないか、といった観測が飛び交うなかで、去る八月二十四日から二十八日まで北京で極秘裡に開かれたことが事後公表された十全大会は、中国共産党史上にも前例のない特異な大会であった。大会が五日間という短期間のうちにおわり（因みに

一九五六年の八全大会は十三日間、五八年の八全大会第二回会議は二十四日間、六九年の九全大会は同じく二十四日間、今日のうちに、北京駐在の外国特派員や在外公館が多く、また、こゝ一、二カ月、この問題で一斉に視線が注がれていたにもかかわらず、それらのウォッチャーたちにまったく気づかれないまま、千二百四十九名にのぼる中国の各級代表を一堂に会させ、大会を極秘裡にすませて事後公表したという外面的な事実だけをとり、そこにナゾを感じない者は少ないであろう。こうして、およそ近代国家の首都における公的な政治行事としては、常識的な予想をはみだす事実がいつも当然のことのように進んだのだが、このような党大会が北京のどこで開かれたのかについても、それを明確に判定する根拠はない。新華社が流した大会の光景を伝える写真からすれば、中南海の「禁断の地」にそのような場がないかぎり、あの人民大会堂であろうことは明らかだが、だとすれば、大会代表はどのようなかたちで、どのような経路でそこに集結したのであろうか。もとより、このようなミステリーを解くのがこゝでの課題であろうはずはないが、あえてそのヒントを求めらば、最近の中国で、そしてまた十全大会の周恩来政治報告でも強調されているスローガン——「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、覇権を求めない」のなかに、それは求められるのかもしれない。ここで、北京の地下道や地下施設の最近の注目すべき建設ぶりについては、すでに多く

の報告や情報があるところである。

代表選出の恣意性と機密性

さて、十全大会の新聞公報は、『「団結の大会、勝利の大会にしよう」という毛主席のよびかけを、政治、思想、組織の面から、りっぱに実現した」と総括した九全大会の新聞公報（六九年四月二十四日付）同様に、『今回の大会は、団結の大会、勝利の大会、生気はつらつとした大会であった』と強調している。だが、もしもそのような大会であったのなら、そして、わが国の多くの新聞解説が試みたように、毛沢東・周恩来体制のゆるぎなき安定と新しいリーダーシップの順調な形成がそこに見られるのなら、今日の中国を纏って外面的に看取される諸々の状況に照しても、大会を通例どおり開くか、少なくとも九全大会程度の予告と中間報告があるべきであり、むしろそのことによってこそ「団結の大会、勝利の大会」という印象をより広範に与え得るはずであることは言を俟たない。それなのになぜこのようなかたちの大会になったのか、という当然の疑問が、ここですでに残されることはいうまでもない。この疑問は、十全大会の準備状況を九全大会と比較したときより明白になるであろう。九全大会は、文化大革命収拾段階の流動的な情勢のなかで党再建を課題に準備がすすめられ、すでに六七年段階から様々な措置が講ぜられてきていた（毛沢東「第八期十一中全会閉幕式での講話」ほか、参

照)。そうしたなかで党中央と中央文革小組は大会成功の絶対的保証を求めるために、各省・市・自治区革命委員会ほかの各組織にたいし「九全大会の召集についての意見聴聞にかんする通知」(六七年十一月二十七日)を出し、やがて六八年十月の十二中全会では新党規約草案にかんする決定を見、六九年元旦の三紙誌共同社説「毛沢東思想ですべてを統率しよう」、同三月十四日付『紅旗』(第三・四合併号)社説「経験の総括について」などに含意された手順を踏んで六九年四月、五八年の八全大会第二回会議以来十一年ぶりに開催された大会であった(これらの点について詳しくは拙稿「文化大革命と九全大会」、アジア調査会編『中国総覧』一九七二年版、参照)。

このような措置は、九全大会の構成そのものが、当時の毛・林指導部への忠誠を前提とした代表から成る以外にあり得ないことを保証するための事前工作であり、このような工作を通じて千五百十二名の代表が集まったのであるが、九全大会の場合は、ともかくも各級革命委員会で黨員代表大会が開かれている事実も報ぜられるなど、その準備のプロセスは比較的透視可能なものであった。

このような事実と比較したとき、今大会までには、たとえば、今大会の一つの基調となった毛沢東の「三要三不要」スローガンすなわち「マルクス主義をやるのであって修正主義をやってはいらない、団結するのであって分裂してはいらない、公明正大であって陰謀術策をめぐらしてはいらない」を

主張して、先の『紅旗』社説「経験の総括について」を思わせる役割を担った論文(『紅旗』七三年第六号巻頭の雲嵐署名論文「経験を総括するなから学ぼう」)なども出はじめてはいたが、全般的には、今大会にいたる政治過程の不可視性は論議の余地なきところである。一方で、大会代表数が九全大会に較べ二百六十三名も減少しているのも、最近の中国共産黨員数が二千八百万にまで増えている事実(『北京周報』一九七三年第三十七号の記事による)に照して不自然であるばかりか、代表の選出方法そのものも「広範に民主を発揚し、代表候補者を繰り返し検討、協議し、代表候補者所在の地区あるいは単位の党内外の大衆から意見を求めたうえで、最後に千二百四十九名の代表を選出した」(十全大会新聞公報)との表現が示すように、その被選出母体さえ不明であり、選出者の恣意性と機密性がここにも示されているといわねばなるまい。

「林彪の遺体を利用して」

以上の諸事実はいずれも、現象面の事柄にあるいは属するのであるが、内容的にも十全大会が異例の大会であったことは明白である。政治報告、党規約改正報告と党規約改正、新たな中央リーダーシップの選出という議題は九全大会と同じだが、従来の「健全な」党大会が、これらの議題のほかに、国民経済発展のための報告や農業発展綱要などについての説明、国際共産主義運動の諸問題についての報告を含ん

でいたことについてはあえてここでは想起しないにしても、歴史的にも、また中国をとりまく国際環境の変化からしても重要な転換期にあるはずの中国が当面する経済建設の基本方針や、米中接近以来の対外関係の重大な変化など、もともと基本的な重要課題について、全面的に問題が提示され、様々な検討が加えられ、理論的総括がなされるという党大会本来のあるべき姿と、それは大きく乖離していた。しかも、周恩来政治報告も、王洪文の党規約改正報告も、たとえば林彪の政治報告に較べてさえ、文量もきわめて短かく、内容も系統だったものとはいえない。いかにも、「急ごしらえ」の感はぬぐえないのである。

このような十全大会は、すでに周知のように、林彪処断と対ソ非難を全党をあげておこなった壮烈な一大儀式の観を呈したのであり、九全大会路線から林彪色を一掃して、林彪異変以来の最高指導部における人事的な空白を一挙に埋め、暫定的かつ過渡的な集団指導体制を形成したものであった。その状況は、まさに、『ニューズ・ウィーク』誌（一九七三年七月三十日号）が大会に先立ってつとに予測していたように、「北京の指導者は、林彪の遺体を利用して、統一への歩みに全力をそそいでゆくであろう」といった趣きだったのである。

毛沢東が吐露した心境

このように見てくると、十全大会が果たして、「十分な準備

をととのえた」（『新聞公報』）ものであったのかどうかについても懷疑せざるを得ないが、十全大会にいたる中国の政治状況のなかには、右のような懷疑を傍証し得る様々な注目すべき事実が看取されたのであった。

まず、その最近のプロセスを中国の公式論調を手がかりにふりかえるならば、昨七二年十一月、『紅旗』第十号の倪志福（党中央委員）論文「経験主義の克服——レーニンの『唯物論と経験批判論』を学習して」が、「一つの矛盾が解決すれば、さらに新しい矛盾が発生し、一つの戦闘に勝利すれば、さらに新しい戦闘を迎えなければならない」と問題を現在形で述べて新たな「闘争宣言」とも思われる姿勢を示したが、翌十二月の『紅旗』第十二号にあらわれた高戈署名論文「革命の新生事物を植えつけ、発展させよう」は、「劉少奇のたぐいのベテン師」つまり林彪を従来の極「左」というレッテルから極右に呼びかえたのであった。次いで七三年元旦の三紙誌共同社説「年頭の言葉」は、陳伯達・党中央政治局常務委員が失墜した七〇年九月の九期二中全会以来すすめられてきた「批修整風」（この言葉は、十全大会で「批林整風」と明らかに呼びかえられた）の優先順位を「批修」が第一、「整風」は第二と規定し、さらに『紅旗』七三年第二号巻頭の俞彰署名論文「党の建設は党の政治路線と密接につながらなければならない——『共産黨員』発刊の辞」を学ぼう」は、「プロレタリア文化大革命および今回の批修整風運動」（傍点引用者）とい

う表現を用いて、今回の「批修整風」運動が文化大革命と區別される闘争の新しい段階であることを示し、すでに結着したはずの林彪異変を超えて、党内にまだ深刻な問題がわだかまっていることを暗示したのである。こうして、表面は「批修」すなわち林彪批判のかたちをとりながら闘争が進展する過程で、七三年一月十四日付『人民日報』の蘇習署名論文「『現実主義深化』論を批判しよう」や「紅旗」七三年第一号の辛永銘署名論文「決して階級と階級闘争を忘れてはならない」が示したように「現実主義」、「平和麻痹思想」への批判を意図した文革的トーンの論調もあらわれ、林彪批判のかたちをとって進展する潮流への「逆流」の存在を感じさせたが、こうしたなかで一方では一連の旧実権派幹部の復活がすみ、それは四月十二日の印象的な鄧小平復活へと連なっていたのであった。鄧小平復活の意味について、ここで詳しく立ち入ることは避けるが（さしあたり、拙稿「鄧小平復活の背景とその意味」、『世界週報』一九七三年五月八日号、参照）、この旧実権派領袖の象徴的な復活は、私自身、彼の復活を早くから予測し得えたその文脈（拙著『中国像の検証』八中央公論社、一九七一年）所収の「林彪の死とその謎」（参照）からしても、文革の挫折と脱文革化への潮流のなかでさえ、さらにこの時点で鄧小平の復活を必要とする状況が存在したことを示したものであろう。これを要するに、周恩来主導の脱文革的潮流における実務派官僚と旧実権派との連合（Coalition）にたいす

る文革グループの再挑戦という政治状況だとして判断し得る一般的な形勢が存在していたのである。

こうした背景のなかで「潮流」はさらに拡大し、各地の総工会、共產主義青年団、婦女連合会の再建も著しく進展して、五月には、今回の王洪文報告で明らかにされた、党規約改正問題のための党中央工作会議が召集されていたのであった。

では、問題はその後、十全大会まで順調に経過したのであるろうか。この点では、同じ五月に中国を訪問したエチオピア・アメリカから初めて訪問したこの第三世界の「新しい友人」にたいして毛沢東が吐露した心境が、当時の状況をかなり映し出しているように思われる。エチオピア大統領の毛沢東会見の内容は、まだ一般には知られていないが、私自身、大統領一行に随行したメキシコの一大学教授から、わが国の若干の記者諸氏を交えて取材したところによると、「自分はまもなく天に召されるかもしれないが、今日、つくづく述懐するに、もっとも重要な問題は、権力を集中することと、若者をもりたてることである」旨、語ったという。この談話は、あるいは、今日の毛沢東の心境と状況認識とをきわめて率直に物語っているのかもしれない。そして、当時の状況は、権力の集中の困難さとその必要性を毛沢東にしみじみと感じさせたものではあるまいか。

文革派幹部の相対的地位の低下

こうした状況ののちにあらわれたのが、すでにいくつもの外電が伝え、わが国では『サンケイ新聞』の柴田穂氏がきわだって指摘していたいくつものナゾである。すなわち、まず、去る八月一日の建軍節には、これまでの例になく三紙誌共同社説がついに発表されず、建軍節レセプションでの軍幹部の演説もなく、周恩来、江青、姚文元の三名がそれに欠席していたことである。七、八月になると、江青、姚文元という文革幹部の公的出現の機会がなくなり、葉劍英、張春橋、李德生、紀登奎ら中堅幹部の出現頻度も急激に減少した。八月十八日から二十日まで、人民大会堂で大規模な集会が開かれているナゾをAFP電やロイター電が伝え、また、穏健派と急進派の対立が再激化したのではないかという観測がこれら外電によってひんびんと伝えられた。「わが党の偉大な指導者毛沢東同志」、「偉大な指導者毛主席」と呼んでいる十全大会の諸文献に明らかにように、毛沢東にたいする「偉大な指導者」という形容が消えてしまったわけではないが、八月三日以降の『人民日報』はこの形容をあえてはずし、十全大会においても、従来はこの形容が用いられていないことはたしかである。因みに、九全大会の林彪報告が「われわれの偉大な指導者毛主席万歳！ 万歳！ 万万歳！」でおわっているのにたいして、今回の周恩来報告はたんに「毛主席万歳！ 万万歳！」

と叫んでいるにすぎない。さらに、すでに十全大会開催中であった八月二十五日の新華社通信は、A A A卓球大会の報道に関連して、最初は通例どおり、周恩来、江青、葉劍英の序列で指導者の出席を報じていたが、第二版記事ではこの序列が周恩来、葉劍英、江青と訂正され、この変化の意味はやがて十全大会において明白になったのである。江青、姚文元という文革幹部の相対的地位の低下が明らかにしつつあったはずの翌二十六日には、譚震林、ウランフという旧実権派の重要スタッフの復権が伝えられた。

暫定的決着の儀式

これらの事実を、これまでの検討と重ねあわせて考えるならば、極秘裡に開かれた十全大会の異例さにたいする解として、次のような推測があるいは可能ではなからうか。

すなわち、中国は十全大会の開催にいたる最近の過程において、林彪異変以後の政治的空白に決着をつけるべき必要に迫られていた。そして、そのような決着の必要性は、十全大会であるよりはむしろ全国人民代表大会の方にこそあったのではなからうか。しかし、そのためには、決着の場が九期三中全会であるにせよ、九全大会第二回会議であるにせよ、まず党レヴェルにおいて問題を明白にしなければならなかった。だが、そのような準備のプロセスでどうしても問題の調整ができず、そのために、あえて新しい党大会を急遽準備し、強

行することによって問題の暫定的な決着をつけようとしたのではなからうか。暫定的な決着がつくかどうかの保証は必ずしも十分でなかったために、党大会を極秘裡に開催しなければならなかったのではなからうか。いずれにせよ、林彪批判と対ソ非難という既定の事実をこれほど激しくキャンペーンし、誰もが当面は一致せざるを得ないこの点において党大会を儀式化したという事実は、別のところに存在する核心的な問題を暫時凍結し、一時的な調整をはかったものと思われてならない。その場合の核心的な問題とは、脱文革の潮流にたいする文革の潮流の抵抗すなわち穩健派と急進派の対立として描けようが、その争点は、中国の工業化や国際社会に対応すべき当面の重要課題をめぐる論争、もしくは広く「紅」と「專」との関係をめぐる論争という歓迎さるべき次元のものではなく、「林彪反党集団の壊滅は、党内の二つの路線の闘争が終結したことを意味しない」と力説してやまない周恩来政治報告が現に示唆し、また十全大会にいたるこれまでの曲折したプロセスが暗示しているように、新しいリーダーシップの形成をめぐる角逐であり、復活した旧実権派幹部の位置づけや全般的な党内序列の帰趨にかんしてであったと思われる。

こうした状況のなかで、党大会が開催され、暫定的に問題が調整されたとするならば、八月中旬の人民大会堂における集会のもつ意味も、ほぼ推測できるであらう。

苦衷の色濃く周恩来政治報告

さてここでいよいよ十全大会で新たに形成されたリーダーシップの基本的性格と、この大会に潜在する「終結したことを意味しない」(周恩来)二つの路線の闘争という問題の核心に向って筆をすすめねばならない。

十全体制が基本的に妥協的・調整的性格のものであることについては、すでに述べたが、それはさらに次のような三重の構成においてとらえられる連合体制だといえよう。すなわち、まず、イデオロギーの面からこれをとらえるならば、周恩来、葉劍英、李德生、李先念らの穩健派ないしは実務派、朱德、董必武、劉伯承、許世友、陳錫聯らの中立派ないしは中間派、王洪文、康生、張春橋、江青、姚文元、汪東興らの急進派ないしは文革派の連合という構成であらう。この場合、吳德、韋國清、華國鋒らの位置づけは必ずしも明確にできないが、このような構成において穩健派は旧実権派グループとの連携のうえに十全体制の主潮をとまかくも形成しているように思われる。次には、周恩来、董必武、李先念ら行政官僚と王洪文、張春橋、江青、姚文元ら党官僚、葉劍英、李德生、許世友、陳錫聯ら軍官僚との連合という職能構成であり、第三には、全党的な幹部若返りの必要に応えつつ、いわゆる「老・壮・青」の三結合を中央リーダーシップにおいてもはかろうとした構成であって、それは、毛沢東、周恩来、葉劍英、康

生、朱徳、董必武といった「老」と張春橋、江青、李徳生らの「壮」、王洪文、姚文元の「青」というかたちで実現されたのであった。もとより、こうした三重の構成から成る連合体制を主導したのは、実務派＝脱文革グループであったが、他方では、旧実権派幹部の政治局入りが実現しなかったこと、白相国・対外貿易部長をはじめ國務院行政官僚のなかに中央委員にさえ選出されなかった者も多いことなど、こうした、「潮流」への抵抗も根強く存在したのであり、そもそも妥協的・調整的な連合体制であるがゆえに、「党の一元化指導」がことさらに強調されねばならないのであろう。そして、ここで明白なことは、毛沢東体制下でのこのような集団指導型連合体制において、要するに十全体制とは、そこに参画している指導者たちがそれぞれ様々な角度から、「毛沢東以後」の諸状況を意識し、計量しつつある過渡的な政治権力であることであらう。

さて、こうした状況を背景にしていただけに、十全大会の基調報告である周恩来政治報告は、論理上の矛盾に満ちた苦衷の色濃いものであった。全体のトーンも政治報告らしい格調に乏しく、激しい言葉だけが目立ってどこことなく余裕に欠け、周恩来らしい路線が明白に提示されているものとはとうてい思われないものであった。周恩来ほどの経験と政治力をもってしても、このような報告におわったということは、劉少奇、林彪とこれまで二度にわたって政治報告をおこなった

前任者が、いずれも党史上最悪の断罪を受けて失墜していった、その経験的なジンクスの関頭にいよいよ彼自身立っているのかもしれないという緊張に由来したのであろうか、彼はひたすら林彪の罪行を糾弾し、「党内の二つの路線の闘争は長期にわたって存在し、これから先も十回、二十回、三十回と起るであらうし、林彪のような人物があらわれ、王明、劉少奇、彭徳懷、高崗のような人物があらわれるであらう」と力説したのであった。また、林彪、陳伯達らは、九全大会以降の主な任務が生産の発展にあるとしたが、それは階級闘争を忘れた修正主義謬論であるとして、あえて階級闘争の継続を強調し、著しく「革命主義」のポーズをとったのであった。しかしながら、国内的には脱文革の潮流を主導し、対外的には「革命外交」から「国家外交」への転換を主導しつつある周恩来の今日の明白なポジジョンからして、この姿勢にはかなり無理があるように思われ、またある種の計算が含まれているようにも思われる。このことが実態として脱イデオロギイ的傾向を主導しているがゆえに、論理のうえで、はあえて「革命主義」のポーズをとらざるを得ない周恩来の今日の立場を反映していることだけはたしかであらう。

潜在的な毛沢東批判者としての周恩来

こうした周恩来報告の意味するところはなにかを探索するまえに、十全大会において示された毛沢東主席その人の役割

りと位置づけの変化を次に確認しておこう。まず、十全大会で毛沢東はなにをしたか。新聞公報が表明しているかぎりでは、毛沢東は「今回の大会を主宰した」とされているが、実際には「毛主席は代表たちに親しく手をふってあいさつした」にすぎず、九全大会の新聞公報が表明しているように、開会冒頭「きわめて重要な演説をおこなった」(六九年四月一日付新聞公報)り、大会の期間中に「重要な、人びとの心をふるいたさせる演説をおこなった」(六九年四月十四日付新聞公報)りは、ついにしなかったようである。つまり、十全大会における毛沢東は、きわめて象徴的な役割りしか演じなかったことが明らかになる。一方、林彪批判の一環として個人崇拜、天才論、先驗論などが否定されてきた潮流を反映して、すでに見たように、毛沢東個人の名は今次党大会では大幅に削除され、改正党規約ではそのことがさらに明白になった。八全大会の改正党規約が、「スターリン批判」と非スターリン化の国際的潮流のなかで鄧小平の問題提起によって「毛沢東思想」という表現を削除したものとなり、しかしそのことがやがて文革期における鄧小平の「反毛沢東」の重大な罪状になったことを考えるとき、今回の一連の措置をたんに林彪批判とだけ結びつけて考えてよいのかどうか、その含意はさらに深いところにあるように思われる。そこで次に注目されることは、このような毛沢東個人の役割りを相対化しようとする潮流にもかかわらず、十全大会の諸文献にみられる重要文脈には、毛沢東の名を引く

ことは避けながらも、すべて毛沢東の言葉が当てられていることの意味についてである。周恩来報告にある「三要三不要」の基本原則(前述、引用)は、林彪批判に関連して党中央が通達した「中共中央第十二号文件」(一九七二年三月十七日)に付せられた「毛主席の各地巡視期間における各地責任同志との談話紀要」(以下、「談話紀要」と略記)冒頭の言葉であるし、「中国にもし反共の右派のクーデターが起るなら、彼らは安寧ではあり得ず、おそらく短命であるにちがいないと私は断言する。なぜなら、九十パーセント以上の人民の利益を代表するすべての革命者が容認するはずがないからである」とか、「前途は明るいが、道は曲りくねっている」という、今回、大いに強調された言葉は、やはり林彪批判に関連して流布されている「毛沢東の江青への書簡」(一九六六年七月八日)のなかの言葉なのである。こうして、改正党規約の総綱は、これらの言葉と従来からの「毛主席語録」をすべてつなぎあわせたものになっているのである。

ここに見られる事実は、毛沢東の権威のさらなる高まりのなかで個人崇拜的色彩を一掃して問題を正常化したものとだけ単純にみなせるものかどうか。そもそも、いかに毛沢東といえども、非公開の談話要録や妻へ宛てた手紙のなかの一節が、党大会の基調報告や党規約総綱のなかにそのまま採用されていることの不自然さをこそ指摘すべきであろうが、これはもしかすると、実質的に「非毛化」をすすめつつ、名目的

には毛沢東の言葉を重用して毛沢東の權威への挑戦と解されるリスクを避け、いずれの日か、家父長的な党の私物化を批判する際のために周到に配慮された周恩来の遠大な戦略なのではないかという気さえしないではない。しかも、今回、林彪のクーデター計画の書といわれる△「五七一工程」紀要▽が「批林整風」の材料として用いられてきた事実が周恩来報告で公式に確認されたが、この広く流布された△「五七一工程」紀要▽のなかには、次のような文章が書きつらねられているのである。「彼らの社会主義は實質的には社会ファシズムであり、彼らは中国の国家機関を、相互に惨殺しあい、相互に陥れあわせる挽肉機に変え、党と国会の政治生活を封建專制独裁式の家父長制の生活に変えている。」「現在、彼は中国人民が与えた信任と地位を濫用し、歴史的に反対の方向に歩み、実際には彼はすでに現代の秦始皇になっている。」「マルクス・レーニン主義の皮を借り、秦始皇の法を執った中国史上最大の封建暴君である。」等々。これらの言葉は、それが流布されたとき、中国民衆にとってどんなにか刺戟的な言葉であり、毒を含む言葉であることか。このような内容を含む△「五七一工程」紀要▽を、中国の公式な発表どおり林彪が作製したのかどうかをいまここでは詮議しないが、このような文章が流布されることを毛沢東自身は果たして望むであろうか。もしも、一つの推測が許されるのなら、まさに「潜在的な毛沢東批判者」としての周恩来こそ、「林彪の遺体を利用して」

(前掲、「ニューズ・ウィーク」)来るべき時期への布石を着々と打っているのではなからうか。もしも、このような推測が成り立つなら、今回の政治報告における周恩来の緊張ぶりもおのずから理解できよう。だが、それにしても林彪異変のナゾはまだ解けない。

王洪文報告における「衝撃の手がかり」

そのようなとき、われわれは、きわめて衝撃的な手がかりを、今回の王洪文の報告のなかに見つけだすことができるのである(因みにこの王洪文報告は、その入電が朝刊原稿締切り間ぎわであったためか、王洪文その人には脚光が集中したにもかかわらず、わが国の新聞はきわめて不完全にしかこれを紹介せず、改正党規約のみが紹介されただけであった)。

冒頭に伏線として引用した箇所を改めてここに引くならば、次のとおりである。

「路線にかかわること、大局にかかわることであれば、真の共産党員は公につくす心をいだいて、免職をおそれず、党からの除名をおそれず、入獄をおそれず、殺害をおそれず、離婚をおそれず、敢然と潮流にさからわなければならぬ。」

もちろん、誤った潮流にたいしては、それに敢然とさからうかどうかという問題があるだけではなく、それを見分ける能力があるかどうかという問題もある。……そ

のうえ、陰謀術策を弄する者が故意に見せかけをつくるので、われわれが見分けるのをいっそう困難にしている」(王洪文「党規約改正についての報告」)。

右の個所は、中国共産党内の内部闘争がいかに熾烈なものであるかを示唆するに余りあるが、それにしても林彪批判一色の党大会の、その林彪関連事項削除のための党規約改正報告において、免職、除名、入獄、殺害、離婚をおそれず潮流にさからう者こそが真の共産黨員だというに等しいこの表現は、あまりにも衝撃的かつ刺激的でありすぎる。免職、除名、入獄、殺害、離婚という結末になったのは、ほかでもなく林彪とその集団なのであるから、読み方によっては、林彪の逆をたたえ、追悼しているかのように受けとめられるこのような表現を、なぜ、このような場であえて用いたのであろうか。

林彪異変と周恩来

周恩来報告がきわめて激しい感情の昂ぶりのなかで林彪の罪行を糾弾しているのたいし、王洪文報告は意外に林彪批判のトーンが低いことも一読して明瞭だが、これらの事実からすると、そもそも林彪異変は、その公表された筋書きや、さらにウィルフレッド・バーチェット記者が公認の筋書きと北京での聴き取りをもとに再構成してみせたその真相(『脱壳

新聞』七三年八月十四日付)とは大きく異なっており、末期を迎えつつある毛沢東家長体制下での周恩来と林彪との死活の闘争であり、そうした「喰うか喰われるかの闘争」のなかで、林彪らは、周恩来らの実務派官僚と文革期に林彪に痛めつけられた旧実権派勢力および林彪の抬頭を歓迎しなかった非林彪系軍幹部の連合勢力のまえに、結果的には空しく墜えていったのではなからうかという飯説が成立する。このような飯説に立つならば、林彪のモンゴル領ウンデルハンでの墜死という中国側の公表にもかかわらず、モンゴル当局もソ連政府も林彪の遺体をついに確認していない事実や、バーチェット記者のストーリーでさえ、林彪異変に周恩来が直接の当事者として大きなかわりあいをもっていたであろうことを認めるものになっていること、香港で昨年私自身が取材した情報(『人民中国のサイレント・マジョリティ』『諸君』七二年十二月号)も、林彪異変での周恩来の役割りをきわだたせて認めていたこと、去る八月二十九日のAFP電が中央通信の伝えた大陸情報として林彪の周恩来暗殺計画を報じていること等々が、こうした周・林の角逐を傍証し得る。しかも、九全大会以降の林彪ら軍幹部の著しい抬頭と大量進出は、中国を一種の「兵営国家」たらしめていたのであり、こうしたなかで中ソ対立に直面した軍は、林彪の「人民戦争の勝利万歳」論文や九全大会報告にも明らかなように、歯止めのない対ソ対決路線を提起しており、軍事予算の大幅増大や国防力の増強をさらに

求めて周恩来に大きな脅威を与え、米ソ二正面作戦を避けての緊張緩和政策として周恩来が主導した米中接近にも反対することとなり、こうした対立の極みにおいて林彪グループは、「予防クーデター」的に失墜をよぎなくされたのではなからうか。

だとすると、林彪異変という深刻な代価のうちにニクソンを北京に迎えた七二年二月の周恩来の緊張ぶりについても諒解がつくであろう（この点について詳しくは、拙著『中国像の検証』△前掲▽所収の「米中会談の真実と残像」参照）。

こうしてみてくるならば、林彪批判の材料として流布されている諸文書にみられる信じがたい論拠や作為性についても、納得されよう。△「五七一工程」紀要▽については先にも若干の問題点を指摘したが、先述の「談話紀要」にしても、毛沢東の談話は林彪異変の発生をあらかじめ予知して語ったものではあろうはずがないのに、異変発生当日の七一年九月十二日までの談話が収録されているという「見事な」整合性にかえて注目せざるを得ない。

「毛沢東の江青への書簡」流布の背景

さて、林彪異変について、以上のような仮説が成り立つとして、毛沢東その人は、この問題にどのようなにかかわったのであろうか。

これらの諸点を詳しく検討する紙数は、すでに尽きている

が、毛沢東は本来、それまでのプロセスが示した事実経過どおりに林彪を後継者に指定し、中国の後事を彼に託そうとしたことについては疑いない。そうした経緯をもたしたものは、文革、つまり毛沢東にとつての深刻な危機の奪回に林彪の軍が奪権闘争を通じてはたした功績にほかならず、それゆえにこそ九全大会では林彪を後継者に規定したのであった。

九全大会当時は、林彪のそのような声望を周恩来も防げなかったことは事実であり、彼自身、公衆の面前で「林彪同志に学ぼう」といくたびか叫んだ事実も忘れるわけにはいかない。そして毛沢東は、九全大会のテレビ画面も印象的に映し出していたように、「親密な戦友」林彪をいとおしくも力強く庇護してきたのであった。

さらに「談話紀要」が伝えるように、七〇年の廬山会議（九期二中全会）で陳伯達が林彪を国家主席につけようと画策して失敗し、陳・林への批判が醸成されたのちに、七一年四月の陳伯達批判の「九十九人会議」で林彪の地位が著しく危険なものになるまで、毛沢東はむしろ林彪を庇護する姿勢をとりつづけていたらしく、このことは当の「談話紀要」から十分にうかがえるのである。この点は、今回の周恩来報告が「九全大会の開催中と大会後、林彪は毛主席、党中央が彼にたいして教育し、阻止し、救いの手をさしのべるのを無視し」（傍点引用者）と述べていることも矛盾しない。

しかし、衝撃的な林彪異変が起り、周恩来の林彪にたいす

る勝利がもたらされ、しかも文革の挫折は、脱文革の潮流の抬頭をもたらし、ゆくといい現実の情勢のなかで、毛沢東も林彪にたいする立場を表明せざるを得なくなり、こうして、一九六六年七月当時、毛沢東にたいする林彪の態度のなかに一抹の不安と危険を感じたことを妻にひそかに語った「毛沢東の江青への書簡」が昨年十月以降、流布されはじめたのはなからうか。毛沢東はそこで当時の林彪らへの同意を不本意なことだったと語っている。だが、このような私信が今日、流布されざるを得ないことこそ、毛沢東にとってきわめて不本意なことではなからうか。一方、周恩来の側にも毛沢東体制下の「非毛化」をすすめるながら、それがきわめて危険の多い、困難なプロセスだという背景がまだまだ存在する。

こうして十全大会を迎えたのであったが、この場合、王洪文は、今日の状況と勢力関係の複雑な拮抗のなかで、毛沢東のみがかりうじて認知し得るプリンスとして登場し、先に引用したようなトゲを含んだ言葉を用いて、暗に周恩来批判を含意したのではなからうか。因みに、王洪文は、党規約改正報告のなかで毛沢東個人にかんする表現を削除した件については、一言も言及していないのである。王洪文は、たしかに今日の中国指導部全体のイメージ・アップにふさわしい経歴と条件をそなえているのだが、以上のような文脈からすれば、張春橋や、姚文元がこの地位につくことがもたらすであろう摩擦や軋轢を避け得る人物としてこそ、ここに登場したので

あろう。従って、王洪文が巷間伝えられているNO・3の地位を実力的に占めているのかどうかという疑問も残るが、以上の仮説を採用すれば、後継者として明文化された林彪になぜ毛沢東暗殺を計画する必要があったのかといった林彪異変そのもののへの初歩的かつ根本的な疑問にも答え得るように思われる。

中国を繞る二つの圧力

ともかく十全大会は、多くのナゾに充たされた大会であった。にもかかわらず、そこに見られる妥協的・調整的な勢力バランスをかりうじて支えているのは、今日の中国をとらえて客観的に存在する次の二つの圧力ではなからうかと思われる。その一つは、いずれにせよ一つの歴史的な時代を通過して、やがて来たるべき新しい時代を迎えようとしている今日の中国が、日一日と「毛沢東以後」の諸状況を考慮しなければならなくなっているという時間的緊迫感もたらす暫定的な凝集力であり、二つは、今日の中国を繞る国際環境の変化が中国にもたらしている「閉ざされた中国」から「開かれた中国へ」の外圧にたいし、これに耐えてゆかねばならないという心理的緊迫感もたらす暫定的な凝集力であらう。従って、もしもこの二つの圧力に耐えきれず、暫定的な凝集力が拡散し、もしくは、毛沢東の死や中ソ戦争の危機によってその凝集力の支点に大きな変更がもたらされたとき、情勢はきわめて流

動化する可能性があろう。十全大会での周恩来報告は、あるいはこの点をも読みこんだものであるのかもしれないが、だが同時に周恩来自身も今日、その類なき政治力を精一杯發揮しつつけることによってしか、自己を支えきれない不安定な地点に大きなリスクをかけて立っているようにも思われてならない。

エピソード

ところで、文革から九全大会、林彪異変から十全大会と、今日の中国がたどっためまぐるしい政治過程の航跡を見つめていると、階級闘争の原理のあくなき反復にもかかわらず、「上部構造の分野における革命を重視しよう」というイデオロギー変革への不断の努力にもかかわらず、われわれはそこに階級闘争の原理の著しい退化と観念のシステムとしてのイデオロギーそのもののおそろべき恣意性を感じざるを得ないような気がする。文革以来の「吐古納新」（古きを吐き出して、新しきをとり入れる）というスローガンの頻出にもかかわらず、われわれはそこに古き中国をしばしば看取せざるを得ず、言葉としての革命と実態としての伝統的中国を感じせざるを得ない。今日の「二つの路線の闘争」の舞台を、たとえば村松暎氏描くところの『五代群雄伝』（中央公論社、一九七二年）の舞台と比較したとき、そこに多くの類似性を見出すことの方が容易であることについてはいかんともしがたい

のである。この点で周恩来は、「事はまさに実を務むべし」という処世哲学によって、あの五代の権力の興亡激しい時代を生きぬいた宰相・馮道に比肩すべきか、それとも、そうした処世哲学の深奥にさらにプラスされた遠大な戦略的構想を秘めた現代の政治家としてみなし得るのか、まだまだ即断はできない。

だが、いずれにせよ、社会主義國家としての中国政治の本質において、たとえば、全国人民代表大会がすでに九年近くも開かれず、たとえそれが開かれたとしても、そこに社会主義的民主主義の恒常的な躍動と、その制度的保証が欠如してゆくのであるかぎり、まさに周恩来報告が指摘するように、「これから先も十回、二十回、三十回」と「林彪異変」が招来されねばならないであろう。こうした中国政治の本質への認識を欠如したまま、中国政治の正常化と安定をいかに期待し、「労・農・兵」大衆に支えられた大衆的革命権力としての中国像をいくら描いてみたとしても、それは中国の実像ではなく、情勢の変化によってもろくも崩れ去る虚像でしかないのである。現に、当の中国において、わずか四年数カ月前の九全大会では、そこに集まった俊鋭たちが、「林彪同志の報告は、自分たちの言おうとすることをみな概括しており、読めば読むほど喜びを覚え、読めば読むほど親しみを感じる」（六九年四月十四日付新聞公報）と熱情をこめて語っていたではないか……。